

あとがき

ともかく、ここに、『蕎麦（そば）考』という本書が、柴田書店のあたたかいすすめに応じてできあがった。

何しろ、出版部の方々からいろいろのご指示やご教示をいただいて上梓するまでに、五ヶ月ほどの日子だった。暑い毎日だった。起きては書き、書いては寝る、といった日々であったが、ついに、昼夜が逆さまになってしまったのである。

勿々のうちに書かれたものだけに、著者自身は満身の力をしばって書いたつもりなのに、果たして読者の皆様にはどのように反映するのであろうかと、いささか心配のないわけでもない。

「そば」に関する研究も、まとまって一冊の成書になったものはきわめて少ない。私は大学を卒業すると直ちに、足かけ七年の軍隊生活を除いてそば一筋の研究に終始したので、手もとにある資料はそばに関するものが多く、日頃から心にとめていて関係もあって、秘蔵の資料もいくらかるのである。そして私自身のそばに関する研究結果もいくつかが発表してきたのである。

そんなわけで、そばの本をせひ一冊は自分の眼の黒いうちに書き残しておきたいと思つ今日この頃であった。

家内の父が「橋を毎日渡つていても有難い」とは誰も思わない。台風がきてその橋が龍失すると、渡れなくなるので、そのときにはじめて誰もが橋の有難さを知る……と、よく話してくれた。

やっとこの本を書きあげた今、少しでも自分の喜びを知らせようと思つても、もうその父も他界してしまつたので告げるすべもない。

これまで、いろいろのご指導、ご忠告、ご援助をいただいた方々に改めて厚くお礼を申しあげるとともに、読者諸賢のご批判を仰ぐ次第である。

一九七五年 秋たけなわ

花そばに明け暮れてきし五十路かな

南国宮崎の里にて

長友 大

味覚選書

蕎麦考

*